

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——（その一）



海老沢 敏

一、《むすんでひらいて》とルソー

最初にまず二冊の書物の中から、それぞれ一節を引用させてい
ただこう。

一冊は、園部三郎著《音楽史の断章》（音楽文庫26）音楽之友
社、昭和二十七年）の冒頭に収められた（ジャン・ジャック・ル
ソーと音楽）の冒頭の文章である。

「読者諸君は次の歌をごぞんじだろう。

むすんでひらいて

手をうってむすんで

またひらいて手をうって

その手を上に

読者諸君はこの愛らしい童謡の一節をよむだけで、幼い心をよ
びかえし、そのかれんなメロディをおもいおこすことであらう。

しかし、この歌の作曲者が論文の主人公であるジャン・ジャーク・ルソーであることはほとんど知られていないだろう。彼が偉大な思想家であったことは誰一人しらぬ人はないが、彼が同時に作曲家であったことを知っている人はきわめて少いのではないだろうか。」(同書三ページ)

そして、もう一節は一九六二年(昭和三十七年)、すなわちルソー生誕二百五十年祝年に刊行された桑原武夫編《ルソー》(岩波新書43)岩波書店、昭和三十七年)から、その終章《世界への浸透》の最終節《不滅のジャン・ジャック》に見られる文章である。ちなみにこのルソー紹介を目的とした書物の目次の上部には《念結んでひらいて》の第一節の旋律が掲げられている。

「思想の影響ないし作用は、学者の世界においては固有名詞をとまなび行われるが、一般民衆の世界においては無記名で力づくよく浸透することがある。本書の『目次』に音譜をかかげた『結んでひらいて』の懐しく甘美なメロディ、明治以来それはいたるところの幼稚園で愛誦されているが、その作曲者がルソーであることを知らぬ子ども、いや先生も多いのである。しかも、そのメロディは子どもたちの心を楽しく美しくする。ルソーの思想についても同じことがいえるであろう。」(同書一八七ページ)

園部氏の音楽家ルソー論はすでに四十年以上も前の昭和十一年に《音楽評論》誌上において発表されたものであり、《音楽文庫》に収められるに先立って昭和二十三年に三一書房からおなじく《音楽史の断章》のタイトルの下に出版されている。

この二つの書物が指摘している重要なことは、《むすんでひらいて》の言葉や旋律を私たちが読んだり聴いたりした時、私たちの心の中に生起するはるかな想いであり、その意味である。《むすんでひらいて》という歌詞や《ミレドド・レレミレド》という音の動きは、私たちの幼い日々に対する、私たちの幼い心に対するはるかともいうべき懐しさの感情を喚起してくれるのである。それはまた明治以来今日にいたるまで、いたるところで愛誦されている、という。それでいて、この歌詞や旋律は一体だれが作ったのか、といった疑問や問いを起させないようなかたちで無記名のまま、ひろく人びとの耳に、そして心に浸透してしまっているのだ。

だからこそ、また、紹介した二冊の書物が、このメロディの、そしてこの童謡の作曲者がほかならぬあのユニークな思想家ジャン・ジャック・ルソーであることが一般にほとんど知られていないという事実を強調して指摘しているのである。ルソーの存在を知らぬ人は少ないが、しかし彼が作曲家であったことを知

むすんで ひらいて

文部省唱歌
ルソー作曲

♩ = 104
mp

First system: Treble clef, 2/4 time, *mp*. Lyrics: むす—んで ひら—いて てを—うって

Second system: Treble clef, 2/4 time, *mf*. Lyrics: む—すん で またひらいて てを うって

Third system: Treble clef, 2/4 time, *mp*. Lyrics: そ の— て を う え に むす—んで

Fourth system: Treble clef, 2/4 time, *mp*. Lyrics: ひら—いて てを—うって む—すん で

The score consists of four systems of music. Each system includes a vocal line and a piano accompaniment. The piano part features a steady eighth-note accompaniment in the right hand and chords in the left hand. Dynamics range from *mp* to *mf*. The tempo is marked as ♩ = 104.

らない人がまことに多いという園部氏の指摘は、たしかに現在でもその妥当性を失なっていない。そしてもうひとつの書物も、このメロディーの作曲者がルソーであることを知らないで、子どもたちが、いな教師たちまでが愛誦しつづけている事実を挙げ、こうした現象とルソーの思想のおよぼしている類似の作曲との共通性を浮き彫りにしているのである。

だが、その後、『むすんでひらいて』がルソーの作曲であるというかたちは一応常識として定着したかに見える。いくつかの実例を挙げてみよう。

中田喜直編『こどものうた』（野ばら社、昭和三十七年「再版二刷・昭和四十八年」）には、この『むすんでひらいて』の楽譜がへ長調、四分の二拍子のかたちで、伴奏つきで収録されているが、『文部省唱歌・ルソー作曲』と謳われている（譜例①）。

レコードでも同様である。たとえば昭和四十七年に発表された『キング童謡デラックス・楽しい童謡名曲全集①かわいさかなやさん』（SKM(B)二一〇一）には、独唱池野八千代でこの歌が収められているが、『作詞・不詳／作曲・ルソー／編曲・小町昭』となっている。

『むすんでひらいて』が『文部省唱歌』となっている点については、のちに詳述することになるが、以上の二つの引用例で見

るかぎり、この歌の作曲者がルソーであるというかたちは、現在ではひろく一般に知られているということになるだろう。

ところで、この『むすんでひらいて』には原曲があるときれている。園部三郎氏の別の著書を引用させていただこう。『幼児と音楽』（中公新書215）中央公論社・昭和四十五年）である。

『音楽取調係』によって一八八一（明治十四）年から八四年にかけて、小学生のための『小学唱歌集』（全三巻）が発表された。その小学生用の教科書の第一巻に、今日では『むすんでひらいて』手をうってむすんで……』という歌詞でうたわれている歌曲が、『見たせば、あおやなぎ、花桜、こきませ、みやこには、みちもせに、春の錦をぞ……』という歌詞で、しかも『むすんでひらいて』と同じ曲でのせられていた。（四〇ページ―四一ページ）たしかに、この旋律が一般にひろく日本で紹介されたのはこの『見たせば』のかたちであった。現在流布している唱歌集には岩波文庫版がある。堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』（岩波文庫・緑窓）岩波書店・昭和三十三年）であるが、その最初のページを飾っているのが、ほかならぬこの『見たせば』なのだ。

（譜例②）

柴田清熙（まこと）ならびに稲垣千頼（ちか）の作になる二節の歌詞が上段に、そしてへ長調、四分の四拍子のかたちで楽譜が掲載されているが、

ここにも「柴田清熙・稲垣千頌作詞・ルソー作曲」と記され、さ
らに「この原曲はルソー (Jean Jacques Rousseau, 1712—1778)
の作曲。現在でも、『むすんでひらいて』、手を打ってむすんで』の
歌詞によって愛唱されている」と注記されている。

参考までに、この唱歌のかたちのレコードを紹介しておこう。
ビクターレコードの堀内敬三監修・解説《日本の唱歌2》(JV-
二〇七五—六S)には《見渡せば》が《作詩・柴田清熙・稲垣千
頌／作曲・J・J・ルソー／編曲・小沢直与志》で若草児童合唱
団の演奏によって収められている。またこのレコードの解説では
「今でも子どもたちが『結んで開いて手を打ってむすんで……』
という遊戯に合わせた替え唄を用いて歌っている」と説明されて
いる。

ところで、ここ数年来、こうした《むすんでひらいて》ルソー
作曲について注釈をほどこした唱歌集がふえてきたことが注目
されるのである。最近の唱歌ブームを反映してか、こうした唱歌
集、歌唱集の刊行があいついでいるが、こうした唱歌集のいすれ
もが、《ルソー作曲説》に一応の留保の一句をつけ加えている。

たとえば中公文庫の《日本の詩歌・別巻・日本歌唱集》(中央公
論社・昭和四十九年)では、「この曲は現在『むすんでひらいて』
として広くうたわれている。ルソー作曲説には若干疑問がある。」

とあり、また井上武士編《日本唱歌全集》(音楽之友社・昭和四十
七年)第六刷・昭和五十一年)ならびに三瓶政一郎編《日本童
謡全集》(音楽之友社・昭和四十九年)のいすれもが、《長調、
四分の二拍子の《むすんでひらいて》の楽譜を掲載し、《作詞者
不詳・ルソー作曲》としながらも、「原曲はフランスのルソー(一
七二一—一七七八)の作曲だといわれているが、最近異説も現わ
れてきた」と注記している。もう一つの実例は金田一春彦・安西
愛子編《日本の唱歌(上)明治篇》(講談社文庫A388)講談社・昭
和五十二年)である。「作詞は、すでにあった外国の曲に合せて
作ったもので、この曲は、フランスの思想家かつ教育学者のルソ
ーの作だと伝える。ルソーの喜劇『村の易者』の一節だと言われ
ているが、異説もある」

「ルソー作曲説には若干疑問がある」とした中公文庫版の解説
を執筆されているのは園部三郎氏であるが、《若干疑問》がある
とはどういうことであろうか。また《異説》とは一体なんなのだ
ろうか。そして金田一春彦氏の解説にあるように、ルソーのオペ
ラとは、いったいどのような関係を、この《懐しく甘美な》、《楽
しげな》、そして《愛らしい》《むすんでひらいて》の旋律は持つ
ているのだろうか。

こうした問題にアプローチを試みるのが、ただたんにこの旋

15

見わたせば*

柴田清熙

一

見わたせば、あおやなぎ、
花桜はなざくら、こきませで、

みやこには、みちもせに
春の錦はるのにしきをぞ。

さおひめの、おりなして、
ふるあめに、そめにける。

稲垣千鶴

二

みわたせば、やまべには、
おのえにも、ふもとにも、
うすきこき、もみじ葉もみぢはの
あきの錦あきのにしきをぞ。

たつたひめ、おりかけて、
つゆ霜つゆしもに、さらしける。

—「小学唱歌集(初)」冊14・11

見わたせば

柴田清熙 作詞
稲垣千鶴 作曲

みさわおわたせばのあおりやなぎて
はなるがくめにこそまにげてる
みやこにはみちもせに
はるのにしきをぞ

*この原曲はルソー(Jean Jacques Rousseau, 1718-1789)の作曲。現在でも「宮中」で聞いて、手を打つておすんでの歌詞によって感服されている。

律の起源をさぐる音楽史的研究に没頭するだけではすまない性質のものであるという認識が得られたのは、私にとってもじつはそれほど以前のことではないのである。

この連載で、私はこの《むすんでひらいて》の旋律が提示するゆたかな問題圏に、いくつかの方向からアプローチを試みてみようと考えている。たとえば、それは一方では近代日本が生んだ唱歌や童謡や遊戯歌の問題をひとつの具体的な実例をとおして論じるかたちをとることになるだろうが、それがオリジナルな源泉としての西洋音楽とどのような関係にあるかが次第に明らかとされることだろう。また他方では、音楽家としてのジャン・ジャック・ルソーとその作品を、そしてそのルソーの音楽観や教育観を

さぐることになるだろうが、それはルソー自身の音楽とのかかわりあいをこえて、ルソーの歿後、彼の音楽実践や音楽思想が、どのように人びとの心の中に根づいていったかといった問題に展開することだろう。そしてまた、この《むすんでひらいて》の旋律を中心に《ルソーと日本》の不思議なかわりあいもまたあらわとなるにちがいない。

その前に、そうした問題に深く立ち入るために、まず、数年前に新聞や雑誌で展開された《むすんでひらいて》はルソー作曲か？という論議について、そのあらましを紹介することからはじめてみよう。それがまずさしあたって次回の課題である。

(国立音楽大学)

